

九州・韓国岳・高千穂峰

丁野

- ◆日程：2025年11月2日
- ◆山域：九州
- ◆メンバー：2名（丁野+1）
- ◆形態：ハイク
- ◆ルート：韓国岳・高千穂峰



九州に「高千穂」という地名がある。ここは古の日本書紀や古事記の時代における様々な伝説・神話があり歴史ロマンを感じさせる地である。しかし、ここでいう「高千穂」は宮崎県の北部に位置する高千穂峡や高千穂神社等がある場所をさす。実は、ここは一昨日、丸1日かけて巡ってきた。高千穂峡では遊歩道を歩いたり、舟をこいで、渓谷美を楽しんだり、アマテラス鉄道という廃線を利用したアトラクションに乗って田舎の棚田や、高さ105mの橋の上からの絶景を楽しんだり、高千穂神社や天岩戸神社など数々の国内有数のパワースポットを巡ったり、さらに最後は夜神楽まで満喫し、この地の神様のフルコースを堪能した。

■写真上 高千穂峡で舟をこぐ。

■写真中 アマテラス鉄道の高さ150mの橋からの絶景！！

■写真下 高千穂神社で行われる夜神楽。

ところで、少し紛らわしい話だが、宮崎県には「高千穂」という地名が2つある。今日、巡るのは宮崎県南部、鹿児島県との県境にあるもう一つの「高千穂」、いわゆる霧島・高千穂連山である。連山最高峰の韓国岳と多くの神話、伝説のある高千穂峰の2座を1日で歩き、ハイキングを堪能する予定だ。

去年は阿蘇のカルデラのスケールに圧倒されたが、ここ霧島・高千穂の山々も負けてはいない。今なお活発な火山活動している新燃岳や硫黄山は、まさに地球の創成期を彷彿させるダイナミックな景観を間近に見ることができるし、過去に大爆発のあった大火口も無数に点在し、またの噴火の機会を今か今かと伺っているように見える。

さらに、その火口に水が溜まってできた火口湖も点在していて独特な景観を見せてくれる。

霧島・高千穂の山々はどれも比較的手軽に登れるが、今まで歩いてきた日本のどの山とも雰囲気が異なり、この山々が「ジオパーク」と呼ばれている所以をしっかりと肌で感じることができた。ではサクッと報告です。

韓国岳（カラクニダケ）



えびの高原の駐車場に車を停めて8:15に出発。すでに辺りは荒涼とした風景が広がり、早くもジオパーク感が満載だ。ただ、こういうところにも生命は芽吹いていて、こんなガレた荒地でも、それを好むミヤマキリシマの群落があちこちにあり、そのほんの一部が春と間違えて狂い咲きをしている。無機質な風景にあって、一株の原色のピンクがやけに艶やかに感じられる。満開の時期には、この荒地がピンクに染まるそうで機会があれば、ぜひ、訪れたいものだ。

軽く1ピッチほど歩くと、噴煙を上げる火口が間近に望める「硫黄山火口展望所」に着く。硫黄山は霧島周辺の火山の中では最も新しい火山ということで、ゴオーゴオーと不気味な音を上げながら激しく噴煙を吐き出す様は「こんなに近づいて大丈夫なの？」と思わせるほど威圧的だ。

■写真上 最初からジオパーク感満載、後方の山が韓国岳！！

■写真中 狂い咲きのミヤマキリシマのピンクが荒涼とした地に映える！！

■写真下 活発な活動を続ける硫黄山の火口。

さて、傾斜が徐々に急になり、火山特有の溶岩だらけの斜面をグイグイ登って行くと右奥にうっすらとだが鹿児島湾に浮かぶ桜島が見える。そう、ここはもう本州の最南端にほど近い、鹿児島と宮崎の県境なのだ。



さらに登っていくと、眼下に大浪池も姿を現わす。霧島連山の火口湖の中でも最も大きな火口湖で満々と水を湛え、大きなエクボのような池である。ただ、徐々に雲が多くなり、ガスも湧いてきているので、山頂からの絶景を見るためには急いだほうが良さそうだ。

休まずに登り続けると 9:40 山頂着！！僕としては日本百名山の 79 座目をゲット。決して狙っているわけではないが、気にならないといえば嘘になるので、ゲットしたピークが増えるのはやはり嬉しいものだ。

山頂から反対側を見下ろすと直径 900m、深さ 300m の巨大な火口が絶壁に下に見える。遠い昔、きっとここも激しく噴火していたのだろう。

無事、登頂したのはいいが、生憎ガスがかかってしまい展望を邪魔している。「残念、間に合わなかったか！！」と思っていたら、突然、強風がガスを蹴散らし、今なお活発に噴煙を上げる新燃岳！！そして、さらにその後方には「男前」の高千穂峰（タカチホノミネ）の勇姿が・・・！！

これは絶景である！！ここから高千穂

峰を見てしまうと、どうしても登ってみたくなる。「男前」の山とはそういうものである。

■写真上 面白い雲だが天候悪化の兆し？

■写真中 巨大なエクボにも見える霧島・高千穂連山最大の火口湖「大浪池」！！

■写真下左 荒涼たる連山、手前は噴煙上げる新燃岳、後方に男前の高千穂峰！！

■写真下右 2011 年の新燃岳噴火以前の緑に覆われた新燃岳と高千穂峰がこれ！！

しかし、今日の天候は不安定で、すぐにすべての景色がガスの中に隠れてしまう。ただ、諦めていると、一瞬ガスが切れ、再び「男前」が顔を見せてくれるので、これはもう有難味が違



う。「もう、これが最後かもしれない！！」そう思いながら味わうこの絶景のチラリズムは、むしろ、晴れて全てが見渡せるより格好良さを強調するに充分な効果があるようと思える。

ところで、新燃岳の最近の大きな噴火は、2011年だという。その時に5cm以上の火山灰や火山岩がこの付近の山に堆積したそうで、辺りの風景は一変してしまったそうだ。それまでは、ここ韓国岳から新燃岳を通り、高千穂峰まで縦走もできたという。

「ホント、つい最近のことである！！」つまり、いつどこが噴火しても何の不思議もないという不安定さがここ霧島・高千穂連山にはあり、まさに、今も鋭意、活発に火山活動中なのだということを実感せざるを得ないのである。そのうち登山禁止になるとも限らないので、その儂さを充分に噛みしめながら大事に今を楽しもう！！

さあ、この雄大な景色を充分目に焼き付けたら下山しよう。

■写真上 直径900m、深さ300mの韓国岳大火口！！

■写真中 火口の縁は絶壁で近づけない。

■写真下 韓国岳山頂！！

往路を降りるのが最短だが、そうそう来られる場所でもないので欲を出し、大浪池方面に降りる道を辿って周遊することにする。ガスが切れると眼下に巨大なクレーターのような大浪池が望め、素晴らしい景色なのだが、転げ落ちそうな急な階段が延々と続き、さらに所々、その階段が壊れ



ていて、なかなか侮れない道である。ここを転倒に注意しながら一気に降りると、辺りは一転、穏やかな森の道となる。ところどころアップダウンはあるが、今までとは打って変わって歩きやすい道である。所々に色づいた木もあり、それを楽しみに右に右にとトラバース気味に歩けば、やがて車の走る音が聞こえてきて自然に駐車場に導かれた。

■写真上 韓国岳麓の紅葉。

■写真下 高千穂河原より望む高千穂峰！！

◆コースタイム

駐車場 (8:15) ~ (8:50) 硫黄山火口展望所 (8:58) ~ (9:41) 韓国岳 (9:57) ~ (10:39)
韓国岳避難小屋 (10:42) ~ (11:38) 駐車場

高千穂峰（タカチホガミネ）



今日の後半は先程、韓国岳から「男前」の勇姿を望んだ高千穂峰である。こちらは韓国岳と比べ、神話や伝説が盛りだくさんである。天照大神の孫であるニニギノミコトが高千穂峰に降臨したとされる天孫降臨伝説（その時に山頂に突き立てたとされている「天逆鉾」は山頂に突き刺さっている。）そして、山岳信仰（霧島六所権現）の舞台となり、欽明天皇の時代（540年-571年）に高千穂峰と御鉢の鞍部に霧島神宮

の社殿を建立されるも、相次ぐ噴火でたびたび消失し、村上天皇の天暦年間（950年）には天台宗の僧である性空によって、現在の高千穂河原に再興された。しかし、その後も噴火や失火でたびたび全焼するなどの災いにあり、1715年に島津吉貴公により、現在ある麓の場所に再興され、たいそう立派な神宮となり、その一部は何と国宝にも指定されている。

また、坂本龍馬が妻のお龍と日本最初といわれる新婚旅行でこの地を訪れ、天逆鉾を抜いたという逸話も広く知られている話である。

何が言いたいかというと、高千穂峰は神話と伝説に包まれた歴史ロマンの山で、ジオパーク色が強い韓国岳とはまた違った雰囲気が味わえる山だということだ。



しかし、そうはいっても、高千穂峰も山頂近くには御鉢という大きな火口を持ち、似たようなところがあるのも事実である。

前置きはこの位にして、今日 2 つ目の山、「男前」の高千穂峰に登るとしよう。

入山口の高千穂河原から立派な参道を少し歩くと、江戸時代まで本殿があった霧島神宮の立派な鳥居がある。後方には高千穂峰がドーンと鎮座し、その姿はまさに御神体と呼ぶにふさわしい風格を持っている。

しばらく樹林帯を緩々と登って行くと、急に景色が開け、荒涼とした火山の景色に変貌する。ここからは、2011 年の新燃岳噴火の際に堆積した不安定な岩の上を歩いて登るようになる。かなりの急登でところどころに黄色のペンキでルートを示しているが、歩きやすそうなところを選んで登って行く。登りついたところは巨大な火口、「御鉢」の縁で、韓国岳に勝るとも劣らないスケールに圧倒される。この大火口を眼下に見ながら褐色の縁を歩いて行くと、御鉢と高千穂峰の鞍部に着く。ここが最初に霧島神宮が建立された場所とされていて、今は小さな鳥居と祠が祀られている。

- 写真上 御鉢の火口壁！！
- 写真中 高千穂峰の御鉢もスケールが大きい！！
- 写真下 御鉢の縁を高千穂峰に向かって歩く！！

ここから再び急登が始まる。山頂まで標高差約 170m 程だが、足場が悪いので思ったよりきつく感じる。上方で女



性の悲鳴が何回も聞こえる。見ると僕らより若い男女混成のグループが下りてくるが、女性が多く、その女性達が悪い足場でスリップして、そのたびに悲鳴が上がっているのだ。ただ、本人たちはそれを楽しんでいるようで悲壮感は全くない。交差する際に「上に絶叫マシンがあるのかと思いましたよ。」と冗談を言ったらやたらと受けていた。

急登を登りきるとそこが高千穂峰の山頂であった。伝説になっている天逆鉾もしっかり刺さっていた。背後には午前中に登った霧島連山の最高峰の韓国岳、その手前に中岳、それに中岳の陰になって望むことができない新燃岳の噴煙が望める。荒涼とした山々の連なりだが、2011年の噴火前はもう少し緑もあり、生命感の溢れた山の連なりであったようだ。もう、僕が生きているうちににはそういう姿に戻ることはないだろう。こうなると分かっていれば2011年以前に一度歩いて、今と比べて見たかった。まあ、いまさら言っても仕方のことだが・・・。

■写真上 火口の縁の後方に中岳と先程登った韓国岳、それに新燃岳の噴煙が見える！！

■写真中 高千穂峰の山頂まであと少し！！

■写真下 高千穂峰の山頂！！
天逆鉾が突き刺さっていた。

さて、風も強いし、天気も崩れそうなので下山するとしよう。

不安定な足場は、普段、沢登りをしている僕にとってはそれほど歩きにくいとは思えずサクサクと降りていく。すると、さっきの絶叫集団に追いついてしまい、まるで天狗でも見るような目で「ホントに山頂まで行つ

てきたんですか？」と尋ねられた。「ハイ」と答えると「ハエ～！！」と驚嘆し「私たちは叫び過ぎて声が枯れちゃいました」と話してくれた。彼らも存分に高千穂峰を楽しんだようである。

さすがに1日で2つの名山を登ったことでお腹いっぱいである。去年の阿蘇といい、今回の霧島連山といい、九州の火山はスケールがデカい。さらに、火山以外にも、花の名山、岩の名山、超美渓などもあるようで、まだまだ九州の山は興味が尽きることがない。しばらくは年に1度くらいは足を運ぶことになるであろう。ボヤボヤしていると山は逃げるので行ける時にサッサと出かけることにしようと、改めて心に刻むのであった。

◆コースタイム

高千穂河原（12:34）～（13:43）御鉢（13:50）～（14:04）高千穂峰（14:19）～（14:28）
御鉢（14:38）～（15:34）高千穂河原